

北村 古心（きたむら・こしん）

1、プロフィール

俳人、政治家、教育家。青年会や消防団活動から第3代八戸町長に就任。政界引退後は八戸俳諧倶楽部の中心として芭蕉の正風を唱導、芭蕉堂を作るなど旧派俳諧の砦を守る。

<生没>

1868(明治元)年 12月1日 ~ 1951(昭和 26)年4月 15日

<青森との関わり>

八戸町(現八戸市)に生まれる。第3代八戸町長。八戸俳諧倶楽部の中心として活躍。小説家北村小松の父。

2、作家解説

本名益。明治 14 年公立八戸中学校に入学、身体を鍛えるため旧八戸藩士鈴木彦四郎に剣術を学び北辰一刀流の免許皆伝、以後武道に傾倒し数十の免許皆伝を果たしている。また、大変な勉強家で中学校の教師長渡辺村男の門に学び忠君愛国、郷土研究など、大いに影響を受け、同じ門下の義兄湊要之助と 21 年に八戸義塾を設立。さらに名久井山麓の栃内吉忠を導師として徳・学・勇の3綱領を掲げ文武両道に農を加え兵農一致、晴耕雨読、それに神・儒・仏、キリスト教という特色のある教育集団八戸青年会を結成し、運営に当たった。

23 年上京し文学博士根本通明の塾頭となり漢学を修めたが、父の死により 26 年帰郷、以後青年会の運営に専念した。28 年に公開図書館を開いて町立図書館の先鞭をつけ、34 年には消防組頭に就任し消防組織を整備、40 年第3代八戸町長に就任した。

鮫漁港修築と久慈、八戸間の鉄道開通の大事業が成功すると、大正 12 年潔く政界を引退し、風流の世界に一層専念する。

八戸は藩政以来の旧派の俳諧が盛んなところで、明治 36 年八戸俳諧倶楽部が創設され、古心は大正元年に百仙洞として立机、12 年に六世百杖軒を襲ぎ、15 年にはまた百仙洞に戻っている。このころ名久井桜久が旧派の俳誌「みちのく」を出し古心は後見となる。昭和3年、古心の還暦祝賀句会が是川の別荘餐霞荘で催され、全国から参会者があつた。なお、餐霞荘は春秋2回、各地の俳人を招いて開く句会のためにだけ使われた。5年、八戸城趾に7代藩主信房（俳号互扇楼畔李、のち五梅庵）の功績をたたえて五梅庵塔を建立、8年桜曙編纂の『八戸俳諧史』を校訂出版、9年信房の句を編み『五梅庵句集』を刊行、10 年には広島二条殿公卿門星霜庵と八戸の星霜庵を統一、十世星霜庵となる。12 年、古稀の記念に市内類家に念願の芭蕉堂を建立、古心の俳諧への信念と情熱を象徴するものである。なお、同年門弟の手により蕪島に句碑が建てられた。小説家北村小松の父。